

# 情報 SA 育成授業における学習共同体を指向した授業デザイン

中野 彰<sup>\*1</sup>, 岩崎 徳子<sup>\*2</sup>

(要旨) 平成 24 年度から情報 SA を育成するための授業「情報インストラクタ基礎 I」および、「情報インストラクタ基礎 II」が開講された。この 2 つの授業を履修して情報 SA に就任した学生が平成 25 年度に共通教育の情報関連の授業に入り学習支援の活動を行っている。授業では、学習者が能動的に学習し、そこに情報 SA が学習支援に関与することで教室内のすべての学習者、SA が学習共同体を構成することを目指した授業デザインを「情報インストラクタ基礎 I」, 「情報インストラクタ基礎 II」で実施した。この結果、学習者は SA と他の学習者の関わりの中で触発され、SA は活動を通じて得られる精神的価値である自己効力感を高めていた。

**キーワード** : SA (スチューデント・アシスタント), 授業デザイン, 能動的学習

## 1 はじめに

近年多くの大学で、SA (スチューデント・アシスタント) を授業に活用する動きが活発化している。その端緒となったのは、文部省高等教育局 (2000)<sup>1)</sup> から出された「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」という報告書である。この報告書では、「大学はより学生の視点に近い位置に立ち、学生に対する教育・指導の充実やサービス機能の向上に努めることが重要」とした上で、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への転換を提言したものである。

大学授業において、受講生に対する個別的な対応などの補助的な学習支援の機能は、従来 TA が担ってきた。大学院生である TA は授業において、教員の助手的な機能を持つものに対し、学部生である SA はプリント配布等、比較的単純で限定的な授業支援機能にとどまっていた。しかし、最近ではこのような SA の果たすべき機能が見直されてきている。その理由としてあげられるのは、SA に対する考え方の変化である。従来 SA は、教員が行う授業に関する業務のうち、単純作業を労働力として提供することで間接的に授業の質を高める機能を持つ存在と考えられていた。しかし、最近では、すでにその科目を受講した学生が現在の受講生である学生の学習を直接支援する、つまり仲間 (Peer) と共に創造的な学びを行うというピアラーニングの考え方が徐々に浸透してきている。また、立山 (2013)<sup>2)</sup> が紹介しているティームティーチングにおけるピアリーダーの考え方についても注目されている。

多くの大学では、SA は活動を希望する学生を短期間

のトレーニングで養成し、かつ SA の活動を労働と位置づけ対価を支払っている。SA がピアラーニングの機能を発揮するためには、授業で扱われる知識や技能に長けているだけでは不十分で、受講生に直接関わるという点で様々な目に見えない能力の伸張と人間的な成長が求められる。そのため本学においては、SA 育成のための授業 2 科目の履修を義務づけている。

また、ピアラーニングの観点から、SA 活動に対する報酬は支払われない、いわゆるボランティア活動として扱っている。これら 2 点は、他の大学の SA および SA 育成プログラムには見られない本学の特徴である。

受講生同士、受講生と SA、あるいは担当教員も含めた成員が学習の場で協働的に学ぶ状態をとらえて、「学びの共同体」や「ラーニングコミュニティ」などと表現されている。佐藤 (1995)<sup>3)</sup> は、対象世界や自己・他者との対話とそれによる関係性の再構築であるとされるという概念を提案している。本研究では、担当教員と受講生や SA などの授業の構成員を互いに学びあう存在としてとらえ、これらの中に存在してきた壁を取り払い、知を一方向伝達的な流れではなく、双方向対話的な循環に位置づける関係として、学習共同体をとらえることにする。

本学では、SA を育成するための授業科目として、「情報インストラクタ基礎 I, II」を設定している。これらの科目を通じて習得する学習目標は、授業で必要となる情報系の基礎的で共通の知識・技能もあるが、コミュニケーション力や協調的対応力、問題解決力、表現力、論理的・批判的思考力、リーダーシップなどの「人間力」と言えるものも重視している。このような科目の特性から、授業の形式は個別学習、小集団学習、

<sup>\*1</sup> Akira NAKANO 情報教育研究センター長 文学部日本語日本文学科教授

<sup>\*2</sup> Noriko IWASAKI 共通教育部 非常勤講師

A Learning Design for “Leaning Community” in the Student Assistant Training Class.

全体学習という学習形態や学習単位を必要に応じて柔軟に変化させて進めてきた。また学習方法としては、課題の発見、課題解決方法の検討、解決の実施については小集団でのディスカッション、その結果の表現については小集団や全体の中でのプレゼンテーションを行うなどの学習活動を中心としており、受講生自身が学習を進め、授業を形成することを期待し授業を進めてきた。この学習活動の中で、受講生同士、受講生と SA が協働的な学びを形成することを目指して本授業をデザインした。

## 2 本学 SA の概要

### (1) 概要

本学の SA は情報 SA である。学生用の情報 SA ガイドライン (2014)<sup>4)</sup> によると、情報 SA とは、「情報教育研究センターが関与する全学情報関連授業等において、授業の教育効果と質を高めるために学習支援を行う本学学生を言います。学習支援を行う中で情報 SA

と受講生相互の成長を図り、授業改善につなげます」と表記されている。また、「自主的に授業改善や授業の質を高める活動に携わるボランティアです」(2014)<sup>4)</sup>、とも規定されており、教員の労力を軽減するためだけの授業支援活動はその目的ではない。

情報 SA のインセンティブとしては、ボランティア活動と認定されているため、規定の時間活動が続けることで、ボランティア単位を取得することができること、特に秀でた活動を行い、担当教員から推薦を受けた場合には学長表彰が与えられること (2014)<sup>4)</sup>、もある。これら以外にも、成就感、自己効力感なども大きなモチベーションにつながっていると思われる。

### (2) SA 活動の全体像

次の表 1 に本学 SA 活動内容の体系を示す。これによると、全体は大きく、学習支援活動、授業改善の支援活動、SA 組織の協働性を高めるための活動の 3 つのビジョンからなっている。

表 1 情報 SA 活動の体系

iSA-BoA20140205

階層	目的	学習支援活動の推進	授業改善の支援		SA 組織協働性の推進			
	ビジョン	「わかる授業」の運営に参画する	SA の視点からよりよい授業を提案する			SA 活動を発展させ目的を遂行するための協働体制を作る		
	活動	授業支援の活動	担当授業の改善活動	全学的授業改善・FD 活動	SA 集団をまとめる活動	SA の未来を描く活動	SA 活動を広める活動	
3	提案し実施する活動	SA としての意見・アイデアを授業に生かす活動 ・教材の提案(課外) ・教材の作成(課外)	・授業展開に対する具体的評価と提案 ・次時の授業設計に関する提案 ・教材や評価手法に関する提案	SA として提案できる全学的 FD 活動 ・活動の具体的提案 ・具体的段取りの立案 ・実施と評価	情報 SA の組織強化と連絡調整 ・センターとの連絡調整に関する提案 ・具体化の段取り ・自主的運営のための提案 ・公式・非公式を問わず、集団をまとめる	・新しい活動の提案、企画・参加 ・勉強会の新規立ち上げ(企画・参加)	新規広報活動の企画・提案 センターとの調整 その他部署、教職員との調整	
2	主体的参加・場に応じた判断を伴う活動	授業の構成要素としての SA 活動 ・教員から求められた際の SA としての発言 ・グループワークなどへの参加 ・その他授業への参加	・受講者の情報を記録・報告 ・授業展開の気づきを記録・報告など	任意のミーティング、会議等への参加 ・学生 FD サミットへの参加 ・学内外の様々な活動への参加	与えられた範囲内で集団をまとめる	既存の勉強会の継続(企画・参加)	既存広報活動の継続的運営	
1	進んで取り組むことが期待される活動	[教務的活動] [教育的活動] その他、授業や教育の質を高めるための活動	・担当している授業の改善への協力	・ミーティング、会議等への参加	まとめ役に協力する	既存の勉強会の参加	広報への参加 ・広報コンテンツの作成 ・広報の活動	

それぞれのビジョンについて次に簡単に述べる。

ピーター・M・センゲ (2011)<sup>5)</sup> は、共有ビジョンは組織に浸透する共通性の意識を生み出し、多様な活動に一貫性を与えると述べており、ビジョンに対する姿勢として 7 つの段階をあげている。ここでは、センゲの主張を元に情報 SA の活動を 3 つのビジョン、3 段階の姿勢への分類を試みた。

#### ビジョン 1 「わかる授業」の運営に参画する

教育的支援活動や教務的支援活動を通じて授業での

学習支援を行うだけでなく、情報 SA の立場から教員の求めに応じて意見を述べるなどの授業に参加する活動を含む。

比較的定型的な教務的活動、教育的活動は基本であるが、SA 自身も授業の構成要素として授業に参加することが考えられる。受講生、SA、教員という立場による視点の違いがお互いの見方をより客観化させ、学習を深化させることができるのではないかという仮説に基づいたものである。

## ビジョン2 [SAの視点からよりよい授業を提案する]

授業担当者とのミーティング等を通じて担当する授業の設計・評価に関与するなど、学生であるSAの視点から、担当する授業の改善を働きかける。

また、学内外の様々な活動に参加したり、学生の立場でよりよい授業を提案したりする活動を含む。具体的には次のような活動が考えられる。

- ・全学情報関連授業を中心として、よりよい授業の実現に向けた提案を行ったり、授業改善のための様々な活動を行う。
- ・他大学の学生FD組織との交流を行ったり、学生FDサミットなど、学内外の会議やミーティングへ参加したりすることで、学内の学生FD活動に提案を行い、学生FD活動のための様々な活動を行う。



図2 学生FDサミットでのポスターセッション

## ビジョン3 [SA活動を発展させ目的を遂行するための協働体制を作る]

SA集団が大きくなると、授業担当者やSA活動の運営組織（情報教育研究センター）との相互連絡はもとより、SA同士のコミュニケーションも重要になってくる。SA活動の基本は自主的・主体的な活動であるので、SA集団を自律的に運営することが重要であり、SA自身による組織構築と組織運営を行うことが期待される。具体的には次のような内容となる。

- ・集団としての情報SAを組織化し、目的達成のための活動を行う。
- ・ワークショップ等の学習会を計画し実施するとともに、情報SAとして活動の方向性を話し合う。
- ・情報SAの活動を広報するための活動を行う。

### 3 SA育成授業の概要

#### (1) 授業科目の構成

SAを育成するための授業として、情報インストラクタ基礎Ⅰと情報インストラクタ基礎Ⅱを共通教育科目

の情報リテラシー科目に開講している。SAとして活動するためにはこの2科目の履修が必要である。情報インストラクタ基礎Ⅰでは、SAとして授業支援を行う際に必要となるコミュニケーション技法の習得と、情報授業で必要となる共通のテクノロジーに関する知識、技能を育成することを中心にしている。これらの科目では「教える」のではなく「学ぶ」ことを重視しているため、学習方法を学ぶことも授業に含まれている。情報インストラクタ基礎Ⅱでは、マイクロティーチングやケーススタディで実際の場面での対応力を育成することや、SAの立場での授業改善提案に必要となる、授業の基本的要素と授業の設計－実施－評価－再設計に至るPDCAサイクルを学習し課題解決手法などを習得する。授業内容の概要を次にあげる。

1. ガイダンス
2. 本学のシステム
3. SAとコミュニケーション
- 4～7. コミュニケーション技法  
声かけと傾聴、聞き取り、伝達、まとめ
- 8～14. コンピュータの基礎  
(1)～(4) Windows  
(5)～(7) ネットワークとセキュリティ
15. まとめ

図3 情報インストラクタ基礎Ⅰの内容

1. ガイダンス
2. SA活動とICT
- 3～5. ケーススタディ  
授業支援、教材開発支援、自主学習支援
- 6～9. マイクロティーチング
- 10～11. 授業改善と課題解決
- 12～14. PDCA、ブレインストーミング、KJ法
15. プレゼンテーション

図4 情報インストラクタ基礎Ⅱの内容

#### (2) 情報SAとして必要な資質と授業で育成する能力

情報SAとして活動するために必要な能力をすべてこの2つの授業で育成できるわけではない。情報SAとして習得が期待される能力は大きく分けて3つある。それらは「活動に必要な知識・態度」「活動する科目の学習内容の理解」「人間力」であると考えている。「活動に必要な知識・態度」は、社会人として必要な基礎的対応力や授業改善の基礎など活動の前提といっても良い内容である。「活動する科目の学習内容の理解」は、本来的には担当する授業を良好な成績で履修していることが望ましい。「人間力」は、SA活動の本質を支え

る能力であるが、これは、SA 活動を通じながらも育成していくものである。これらの関係を次の図5に示した。

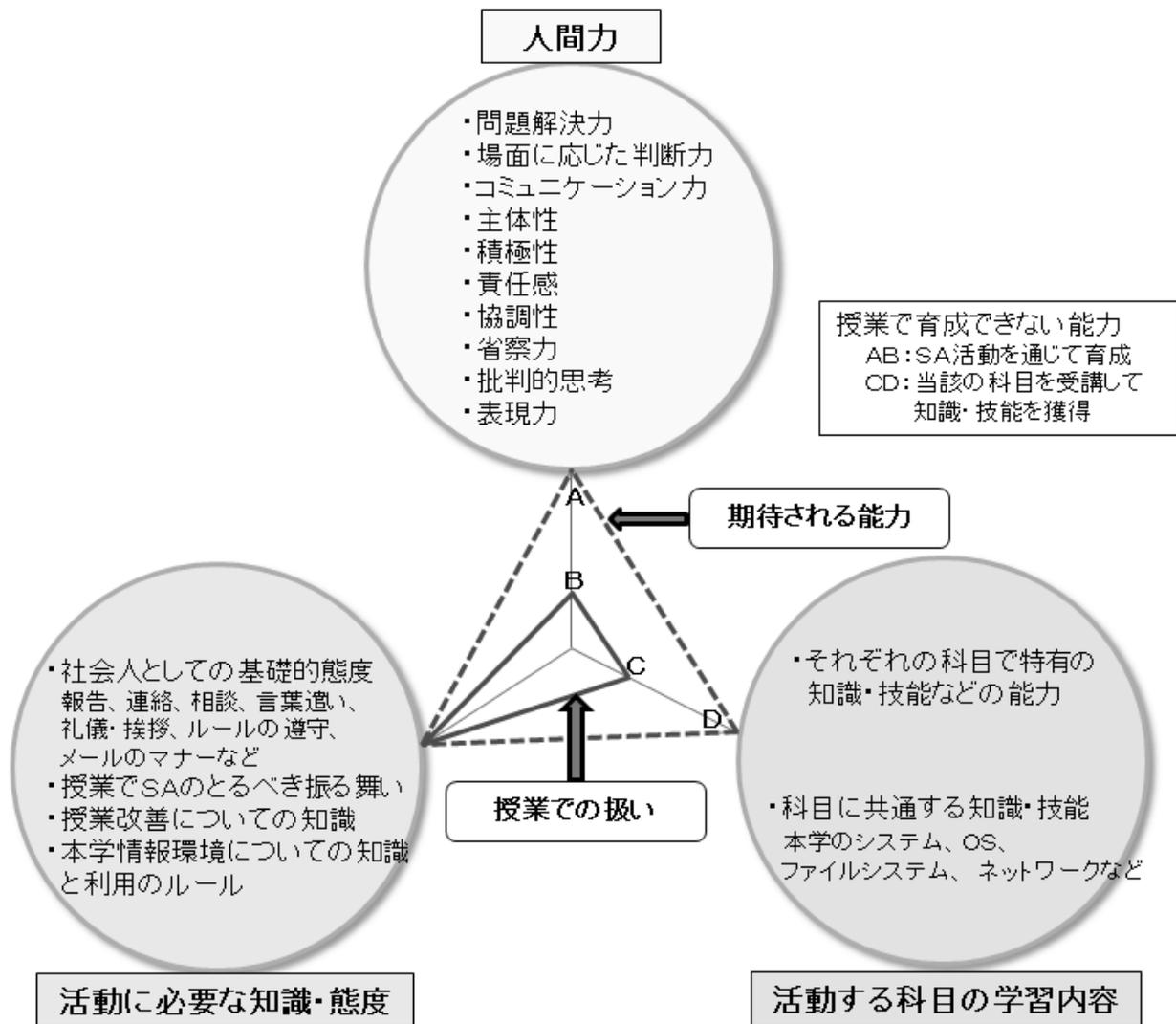


図5 情報 SA として必要な資質と授業での取り扱い

### (3) 授業デザインの特徴

本授業では、いくつかのユニークな実践を行っている。通常は授業ではなく、会議の際に実施されることがあるチェックイン・チェックアウトの試みやすべての授業終了時に実施している自己評価アンケートなどである。また、学習者主体の授業では良く実施されるグループワークではグループの構成方法に工夫をしたことも授業デザインの特徴の一つである。

#### i) チェックイン・チェックアウト

「チェックイン」・「チェックアウト」とは、本来会議への参加者が参加意識を強め、ゴールへの意識を共有する目的で実施されるものであるが、情報インストラ

クタ基礎の授業では、毎回これを実施している。

授業の開始に合わせて一人30秒間のチェックインを行い、授業終了時にチェックアウトを行う。チェックインのねらいは、授業への参加意識を高め、全員が発言する意識を持ち、受講学生一人一人が正直な心情を語ることで授業に臨む前の気持ちを安定させることである。チェックアウトのねらいは、授業で学習したことを一人一人が納得し、正直な授業の感想や自分の関わりを他の受講者と共有することで、授業の締めくくりにすることである。

具体的には2人がペアになって、どちらでも話したい方から話し始める。聞き手はうなずくだけでコメン

トはしない。正直に思ったことを話す、というルールである。共通教育という、受講者がお互い学年も学科も異なる環境では、このチェックイン・チェックアウトの実践は授業におけるコミュニケーションを活発にし、一人ひとりの参加意識を高める効果が見られた。



図6 チェックイン・チェックアウト

## ii) 自己評価アンケート

自己評価アンケートもすべての授業で実施している。授業終了時に約5分間で授業と授業に対する自分自身の関わりについて振り返るものである。授業に対する振り返りとしては、通常の授業評価アンケートと同様に、「今日の授業はよく理解できた」とか、「興味を持てる授業であった」などのような内容である。自分自身の関わりについては、「一生懸命取り組んだ」、「他の人と協力して学習を進められた」など、一般的な振り返りとともに「SAの入る模擬授業において学生役として(SA役として)SA(自分)の動きを的確に評価できた」などの授業個別の質問を含めてすべて5件法によって回答を求めた。また、質問の最後には、その授業についての感想と自分自身の振り返りを自由記述で表現するようにした。これらのアンケートは、LMS(BlackBoard)上で入力し、翌週の授業開始時にこれらの回答結果をまとめてプリント配布するようにした。個人が特定できないように配慮しつつも教員サイドで一切の加工を行わず、そのままの状態を受講生に提示し、記述内容について授業内で話し合いを行った。毎回のアンケートはマンネリ化を招くのが通例であるが、翌週にアンケート結果についての話し合いを持つことにより、モチベーションは継続され、最後まで質・量ともに維持された。

## iii) グループワーク

本授業の学習形態はグループワークを基本としている。グループ活動で行っている学習活動は、課題解決やディスカッション、プレゼンテーション、相互評価、

ケーススタディ、マイクロティーチング、ブレインストーミングなど多岐にわたっている。

グループワークにおいてSAは、グループの話し合いに入り意見を引き出したり活性化させたりする活動も行うことがあるが、通常はグループ活動の中には入らず、外からグループ活動の様子をモニターし、必要に応じて声かけを行う。グループ単位のプレゼンテーションやパネルディスカッションの場面では、SAとしての意見を述べたり、質問を行ったりということグループ活動へコミットする。

本授業におけるグループワークの特色は、ペアリングやグルーピングにあると考えている。本授業では、毎回のように座席を指定して授業回毎にグルーピングを行う。グルーピングについては、ワークシートに記述された学習の目標や、課題解決の方法等に共通点がある学生たちを同一グループにすることが多い。しかし、課題によっては、等質グループや異質グループを構成したり、失敗体験が重要な授業内容では、授業評価アンケートから判断される学生個々の学習性向やパーソナリティなどを考慮してグルーピングを行うこともある。

## iv) 相互評価

相互評価は、主としてグループ内の個人に対して他の成員が評価を行う場合と、グループ単位のプレゼン等の学習で、個別のグループに対して他のグループや他のグループの成員が評価を行う場合とがある。いずれの場合も、あらかじめ評価の観点を決め、観点に沿って評価を行う。評価者は、評価点が評定尺度法の場合、評価結果の根拠を文章表現で示し、被評価者に示すことにしている。SAは評価結果に対するSAとしての意見や感想を持つことで、相互評価にコミットする。

## v) SAの関わり

本授業ではSAが配当されており、受講生に対する学習支援を行っている。しかし、それだけではなく、場面に応じて先輩としての意見を述べたり、パネリストとして参加するなど、様々な形で授業デザインの中に活動を取り入れている。これは、受講生の理解を深める意味があるほか、SA自身の学びにもつながっている。SAはSA活動を行う中で学習し、授業の構成員としても学ぶことができる。これが機能することで、相互に作用する学習共同体を目指す。

## (4) 授業デザインのパターン

授業を構成するいくつかの要素をどう組み合わせ、学習形態をどうするかも重要な授業デザインとなる。

### i) 講義型の授業

このパターンは、「情報インストラクタ基礎I」の

「2. 本学のシステム」と「情報インストラクタ基礎Ⅱ」の「2. 情報SA と ICT」の授業で取り入れた。

授業の始めと終わりには、チェックインとチェックアウトがあり、最後には自己評価アンケートがあるだけで、一般的に大学で実施されている伝統的な講義授業である。

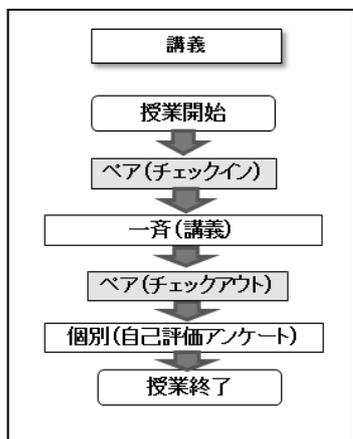


図7 講義型の授業

## ii) コミュニケーション型の授業

このパターンの授業は、「情報インストラクタ基礎Ⅰ」の「4~7. コミュニケーション技法」で主として取り入れた。

本時の授業構成や流れについての説明, 2人組でどのようにコミュニケーション技能を高める学習を進めるか, などの説明を行う。

全員で本時の学習方法の確認を含めて意見交換を行う。この後実際にペアワークで聞き取りなどのコミュニケーション体験を行い、最後は全体で本時の学習をまとめる、という学習展開となる。

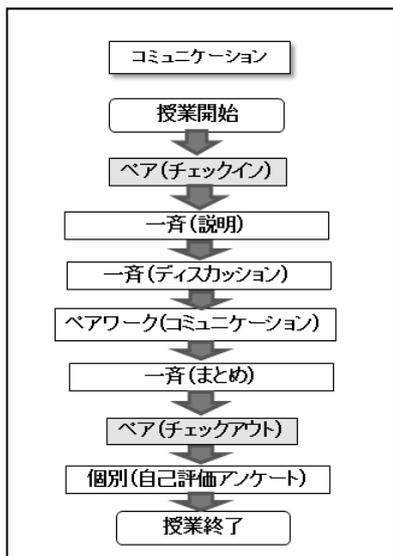


図8 コミュニケーション型の授業

## iii) マイクロティーチング型の授業

特に「情報インストラクタ基礎Ⅱ」の授業においては、現実の授業における場の対応力の育成が求められる。企業ではOJTとして実施する内容であるが、現実の授業における学習支援実習生としてのSA候補生を入れることはできない。そのため、育成授業において、マイクロティーチングを繰り返し行い、授業での対応力を育成している。

この授業パターンは、図4において、6~9回目までの授業で実施している。当日の授業の概要説明の後、SA役の学生がSAとしての振る舞いについてペアワークを行い、活動の目標を決める。その後、授業にSAとして入り、対応についての学習を行う。その活動の様子を他の学生が評価シートに書いて評価し、発表する。この学習を数回繰り返すことで、全員がSA活動の疑似体験とその評価について経験することができる。

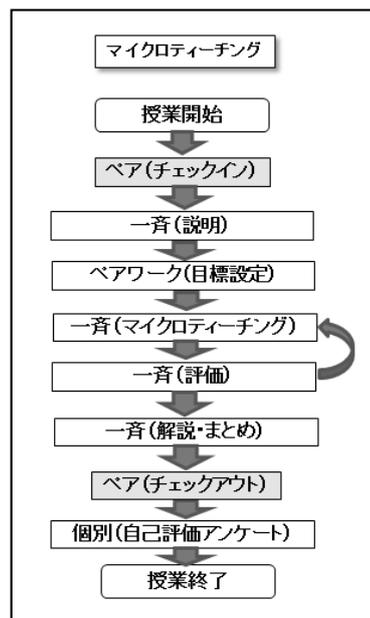


図9 マイクロティーチング型の授業

## iv) パネルディスカッション型の授業

「情報インストラクタ基礎Ⅰ」の8~14のコンピュータ基礎に関する学習、および「情報インストラクタ基礎Ⅱ」の3~5のケーススタディの学習についてはこの授業パターンで実施している。

テクノロジー関係の課題や、実際のSA活動の対応力を考える際に、グループで課題を調べたりまとめたりする。それを全体場で発表する。

この際に、グループ活動でまとめたことについてはグループの成員全員がそれぞれの立場でパネリストとして対応する。多くの場合、授業に入っているSAはパネリストの一人として発言したり、フロアからの発

言という形で議論に参加する。場合によっては、センターの関係教員や事務職員、外部委託のメンター担当者などもパネリストとして参加する場合がある。様々な立場からの発言にふれることができ、受講者の理解を深めることができる授業パターンである。

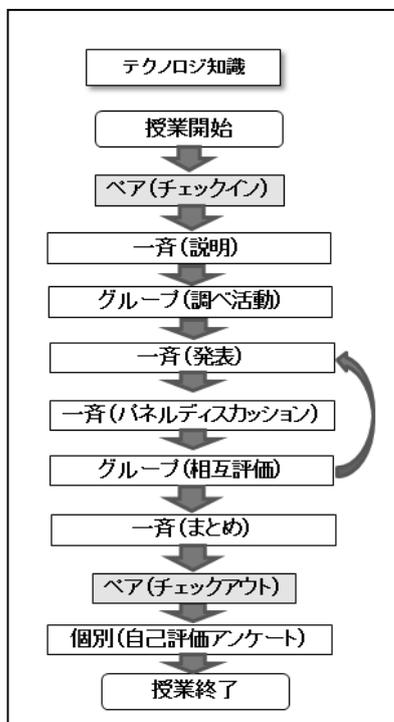


図 10 パネルディスカッション型の授業

#### v) 課題解決型の授業

この授業パターンは、「情報インストラクタ基礎Ⅱ」の12~14で実施しているPDCAの学習に適用している。ブレインストーミングやKJ法の進め方について説明した後、グループ活動で話し合いを行ったり、カードを整理する活動をする。それを全体場で発表し、他のグループからの評価を受ける、というような授業の流れになる。ブレインストーミングの様子を図12にあげる。

ブレインストーミングは、「授業改善にSAはどう関わられるか」というテーマで実施した。このディスカッションをKJ法で整理し発表した。KJ法の様子は図13にあげる。

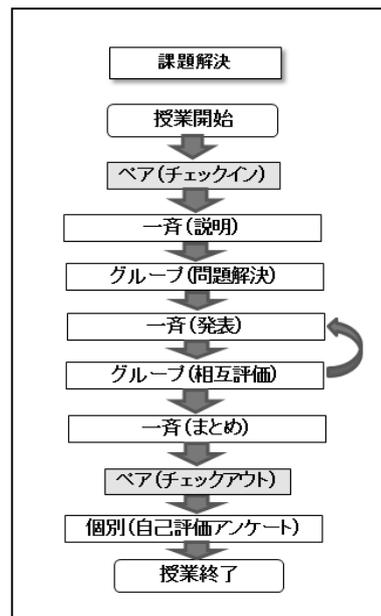


図 11 課題解決型の授業



図 12 ブレインストーミングの様子



図 13 KJ法の様子

## 4 研究方法

### (1) 質問紙による調査

「情報インストラクタ基礎 I, II」の学習効果について質問紙による調査を実施した。一般的に、授業の学習効果については、授業の前後における知識や技能、思考判断や関心態度の変容をその評価対象とするが、本研究においては、図5における人間力に対する自己評価について検討を加える。もとより、自己学習力やメタ認知力のような能力については質問紙による単純な測定や比較は困難であることはいままでもない。ここでは、場面への対応を問うことで、自らの成長や進歩を自覚することができているか、という観点で調査を行った。

質問紙調査については、平成25年度後期「情報インストラクタ基礎 I, II」両方の科目の受講を終えた者12名、情報 SA として授業に入り学習支援を行っているもの2名、本授業とも SA とも無関係の本学学生56名の計70名を対象とした。

調査は、平成26年1月に実施した。

#### i) 質問紙の作成

調査項目については、自己教育力を測定する質問項目（教研式自己教育力指導検査、中学用／小学用、図書文化社）(1988)<sup>6)</sup>を参考にした。教研式自己教育力指導検査は、課題意識、主体的思考、学習の仕方、自己評価の4つのカテゴリに40の質問項目があるが、このうち、本学のような女子大学の大学生に適用できる項目を抽出し、自己評価・メタ認知、自己効力感・自己実現、課題解決の態度のカテゴリを加えて編集し、次のような23項目の質問を構成した。

質問紙は実際にはLMS (BlackBoard) 上に作成し、各質問項目に対して、「大いにそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。

#### ii) 質問紙の概要

本研究で用いた質問紙を次にあげる。

課題意識,
01. 授業の中でわからないことがあれば、後でわかるまで取り組む。
02. 興味深い話を聞くと、もっと調べてみようと思う。
03. 今自分が何をなすべきかを常に考えている。
04. 何かをしようと思ったらすぐにとりかかる。
主体的態度,
05. 不思議なことや珍しいことがあれば自分から進んで調べようとする。
06. 人に教えてもらうよりも自分一人で考えるほうが好きだ。
07. 授業では、自分から進んで意見を発表することがある。
08. 人のやりたがらないことでも、よいと思ったことは進んでやる。
学習方法,
09. 考えを整理するときには図や表にまとめることがある。

10. 授業中、先生の話や仲間の発表をよく聞いている。
11. 授業でわからないことがあったとき、友達と教えあったりしている。
12. 知識を身につける効果的な勉強方法がわかる。
13. 勉強や仕事をするとき、段取りをよく考えてから取り掛かる。
自己評価・メタ認知,
14. 授業の後でよくわかったかどうか振り返ることが多い。
15. 授業では、自分でどこまでわかっているのかを振り返ることが多い。
16. 自分には、今どんな知識や技能が不足しているのかわかる。
自己効力感・自己実現,
17. 他の人の役に立つ人間になりたいと思う。
18. 将来のことを考えて「よしがんばろう」という気持ちになる。
19. 大学の学習を通じて、視野が広がった。
20. 何かにつまずいてもすぐにあきらめずに立ち向かう。
課題解決,
21. 多くの情報から必要なものだけを選択することができる。
22. 課題解決のために、今まで身につけた知識を統合できる。
23. いろいろな視点から、課題に取り組むことができる。

### iii) 質問紙調査の結果

調査結果を特性毎に測定したクロンバックの $\alpha$ については、課題意識 0.79, 主体的学習態度 0.77, 学習方法 0.67, 自己評価・メタ認知 0.66, 自己効力感・自己実現 0.81, 課題解決の態度 0.73であった。

また、承認率（5件法質問紙で4.5に相当する割合）は表2の通りであった。Q検定を実施したところ、5%の水準で有意であった。すべての特性で SA として活動している学生は承認率が高く自分の成長を自覚的にとらえていると考えられる。特に自己効力感や自己実現については顕著である。

一方、SAとして活動するために必要な情報インストラクタ基礎 I と II の2科目を履修済みの学生とそれ以外の一般の学生との比較では、多くの特性（主体的学習態度、学習方法、自己評価・メタ認知、課題解決の態度）で高い承認率が得られたが、課題意識と自己効力感・自己実現では大差ない承認率であった。この中で、自己効力感・自己実現については、授業で得られるものではなく、SA活動を継続する中で強く意識するものと考えられる。

履修済みの学生が主体的学習態度や学習方法、メタ認知において高い承認率を得たのは、本授業の基本的なデザインであるペアワークやグループワークを主体とした学習展開に関係があると考えられる。すでに本授業の履修を終えて、実際に授業に入って学習支援を行っている SA については、学習支援の中で学ぶ、まさに「学習共同体」としての授業が形成されているものと考えられる。

表2 承認率の比較

	課題意識	主体的学習態度	学習方法	自己評価・メタ認知	自己効力感・自己実現	課題解決の態度
SA	0.88	0.87	0.8	0.67	1	0.83
履修済み学生	0.65	0.63	0.73	0.58	0.71	0.42
その他の本学学生	0.67	0.4	0.62	0.47	0.76	0.32

質問紙による調査は、情報インストラクタ基礎Ⅱの授業の中で実施されており、その意味で授業の持つ意味や授業による成長の期待が結果に影響を与えている可能性もある。この意味では今後継続して調査を行う必要がある。

(2) 自由記述による調査

本授業デザインの特徴の項で述べているが、授業終了時に毎回必ず授業評価アンケートを実施している。授業に対する評価と自分自身に対する評定尺度評価に加え、自由記述を実施している。自由記述は次回授業で個人を特定できない形で全員の全文を配布し授業の中で話し合っている。これは、記述のモチベーションを維持するのに役立っている。またこのことで、自分の思いを正確に表現できるようになっていると考えている。

質問紙調査での評定尺度結果について、「大いにそう思う」を5点、「全く思わない」を1点とすると、個人別の平均値は、2.91 から 4.35 までに分布した。最高点である 4.35 を受講生A、最低点の 2.91 を受講生C、全体の中央値に存在している 3.48 を受講生Bとして自己評価アンケートの自由記述を検討する。

検討する観点は、授業デザインとしての授業パターン別の自由記述に見られる質問紙の各特性についてである。

i) 講義型の授業

講義型の授業は多くないが、情報インストラクタ基礎Ⅱの6回目に実施したマイクロティーチングの説明の授業の自己評価アンケートをとり上げる。アンケートに関しては、全文ではなく、授業パターンの性格とその特性についての項目のみここにあげる。

受講生A

…前略…次回の授業からペアの方とSAになり、実際のSAの体験ができるのだと思うと、不安ばかりです。…中略…SAさんの言うように練習はこの一回かぎりなので、大切にしたいです。

受講生B

今までSAはあくまで「授業の補助」という役割だと思っていたのですが、今日の授業で「一緒に授業を作っていく」存在なのだとなり、SAの重要性を再確認しました。…後略…

受講生C

次からのマイクロティーチングでは今まで授業などで習ったことなどが生かしたいです。…中略…困ってる人を見つけるのはなかなか難しいと思いますが目標通りちゃんと気づいて、素早く丁寧に対応したいです。

どの記述も一様に、次回からのマイクロティーチングに期待し若干の不安も感じている。受講生Aの記述から、SAが授業の中で発言し、受講生に影響を与えていることがわかる。講義形式であるので期待される特性に関する記述は見られない。

ii) コミュニケーション型の授業

コミュニケーション型の授業は情報インストラクタ基礎Ⅰの前半に実施している。「正しく伝える」という授業の自己評価アンケートをあげる

受講生A

聞き取ってから、自分でその情報を伝えることがとても難しく思いました。…中略…だけど一番大事なことを自分で判断し、伝えるということはこれからすごく役立つので、今日学んだことを活かしていえたらと思います。

受講生B

…前略…今日は傾聴に気を付けようと決めて授業に臨みました。そうするといつも下を向いてばかりでちゃんと先生の目を見て話を聞いてないことが分かり、反省点につながりました。次回からも実践していきたいです。

受講生C

簡潔に話すことがすごく難しいと思いました。情報漏れが多かったです。私は聞き取ることが苦手です。

レビをみるときにも基本的に字幕をつけているのですが、今度からはちょっと字幕をつけずにみて聞き取る練習をしていきたいと思いました。…後略…

この授業パターンでは、ペアワークによってコミュニケーションスキルを高めている。3人ともこの体験によって自らのコミュニケーションのあり方を、「自分には、今どんな知識や技能が不足しているのかがわかる」という自己評価・メタ認知の観点から見直していることがわかる。受講生Bの記述からは、課題意識の高まりが読み取れる。また、受講生Cの字幕の記述は、課題解決に向けた主体的な学習態度が読み取れる。

### iii) マイクロティーチング型の授業

マイクロティーチングは、情報インストラクタ基礎IIにおいて、いわばSA実習として実施している。

#### 受講生A

今日はマイクロティーチングでした。SAさんのすごさが身にしみて感じました。いつも何気なくサポートしてくれている、その裏ではぎっしりとメモをとり、授業にでている学生一人一人を把握しているんだと思うと、自分はまだまだです。…後略…

#### 受講生B

実際にSAとして動きました。自分が思っているより出来ていなくて、ショックでした。…中略…指摘を受けて、自分への評価の甘さを痛感しました。また、今回は自分の活動ばかりに気をとられて周りを全く見ることができていなかったで、次回からSAとして動く人たちをちゃんと見て、評価できたらと思います。…後略…

#### 受講生C

初めてSAさんのメモを見て図や文字をいっぱい書いていてすごいなと思いました。周りを見ながらメモをとるのは大変そうだなと思いました。今日は初めてのマイクロティーチングだけど丁寧に対応できていたと思います。…後略…

いずれの受講者もマイクロティーチングという体験学習によってあるべき姿と実際の自分の行動の乖離に気づき課題意識を持つことができている。受講生Cは、やや薄いですが受講生Aはこの授業の中で実際に活動しているSAとの活動内容の比較において強い課題意識を持つことができている。受講生Bは今回の経験を他の受講者に対して生かそうという自己効力感の萌芽が見られる。

### iv) パネルディスカッション型の授業

情報インストラクタ基礎Iの終盤に実施している授

業パターンで、図10のように展開した。テクノロジーの基礎知識を課題として扱っている。

#### 受講生A

…前略…ウイルス、Windows Updateについて、しっかり発表してくれたので理解することができました。自分でももう一度調べてみようと思いました。ただ、今回は一人の態度がすごい目につきました。みんなが頑張っているのに一人によって台無しになるんだと思いました。

#### 受講生B

…前略…発表の時点で自分たちのグループは圧倒的に調査不足だと思いました。このようなときは発表の仕方を工夫すべきでした。集中攻撃を受けたのは私ですが、…中略…同じグループだった2人にはとても迷惑をかけてしまいました。

#### 受講生C

各班とも簡潔にシンプルにまとめられていてよかったです。今までの班などの注意点から改善しようという努力が伝わってきました。質問にもきちんと答えていてすごいなと思いました。…後略…

受講生Aはパネルディスカッション型の授業により新たな課題意識を持つことができている。受講生AもBも同様に、グループ活動における個の学習や振る舞いのあり方に言及している。今回の質問紙を構成する特性にはない項目であるが、協同的な学習態度の重要性に気づくことができたことは意義深い。

### v) 課題解決型の授業

前項のパネルディスカッション型も授業形態が異なるだけで、基本的に課題解決型の授業である。図10に課題解決型の授業パターンを示す。ここでは、情報インストラクタ基礎IIの3回目に実施したケーススタディの自己評価アンケートを取り上げる。

#### 受講生A

…後略…先生やSAさんがだしてくれたケースは実際にある悩ましいケースでした。グループ内での話し合いでは、いろんな場合を考えお互いに共有でき、他のグループの発表は自分たちでは出せなかったこたえを出してよかったです。

#### 受講生B

直前まで貧血で動けなかったということもあり、終始頭がぼんやりしている状態でした。…中略…SAになった時にこんなことがあると、授業に支障をきたしてしまう恐れがあるので次からは気をつけたいと思います。…後略…

## 受講生C

…前略…注意しなければいけないのはわかっているけど実際自分がSAになったときにほんとにできるかなと不安になりました。しかし、相談できるセンターがあるのは心強いなと思いました。…後略…

本時はSA活動において場面に応じた処理について、ケーススタディを通じて学習したものであるが、SAも授業の中で自分の経験したケースを提示するなどの学習活動に参加している。受講生Aはグループワークの中でお互いが触発されたり深めあったりする学習方法についての気づきがある。

様々な授業パターンでの自己評価アンケートの自由記述を検討してきたが、学習に対するよりよい気づきや変容が見られるのは、それぞれの視点で授業と自分自身を振り返り自らの省察ができた場合であったと考えられる。

## 5 おわりに

平成25年度にSAの育成授業としての情報インストラクタ基礎IとIIを実施した。授業の中で学習者に様々な場面でSAが学習活動にコミットすることを前提に、ペアワークやグループワークを多く取り入れた能動的な学習の形態を進めた。

担当教員を含めて学習者(受講学生)やSAなどの授業の構成員を互いに学びあう存在としてとらえ、双方向対話的な循環に位置づける関係として、学習共同体をとらえてきた。その意味において、SAも受講者も授業という同じ学習環境においては、学習共同体として機能することになる。この中において、学習共同体構成者がいずれも変容し成長できることを目指した授業デザインはどうあるかについての検討を行った。本授業では、チェックイン・チェックアウトや授業評価アンケートをすべての授業で実践したほか、学習目標

に応じたさまざまな能動的な学習(コミュニケーション型、マイクロティーチング型、パネルディスカッション型、課題解決型など)を授業デザインとして提案してきた。

その結果、学習者はSAからと他の学習者との関わりの中で様々な気づきが起きるとともに、触発されていた。そのことに影響されていると考えられるが、学習者は主体的学習態度やメタ認知、学習方法、課題解決の態度などの点で高い自己評価を行っていた。また、SAはすべての面で一般の学生に比較して高い自己評価を行っていたが、特に自己効力感については際だって高く、SA活動を通じて得られる精神的な価値として自己効力感を得ていると考えられる。

## 6 参考文献

- (1) 文部科学省, 大学における学生生活の充実方策について(報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chouSA/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chouSA/koutou/012/toushin/000601.htm) 2000
- (2) 立山博邦, 大学におけるスチューデント・アシスタント(SA)制度の考察－日米比較の視点から－, 立命館アジア太平洋大学『社会システム研究』, VOL26, pp.137-146 2013
- (3) 佐藤学, 『学び－その死と再生－』 太郎次郎社, 東京 1995
- (4) 情報教育研究センター, 情報SAガイドライン(学生用) 2014
- (5) Peter・M・Senge 枝廣淳子, 小田理一郎, 中小路佳代子訳, “The Fifth Discipline” 学習する組織, 英治出版, 東京 2011
- (6) 北尾倫彦, 自己教育力指導検査, 図書文化社, 東京 1988